

大学における学習及び生活

大学入学後の学業成績を予測するのに、どういう入学者選抜資料を使用し、どういう組合せで行ったらよいか、また学生の大学における学習と生活に現行の入試制度がどういう係わり合いをもつか等、この種の調査研究については、今回もほとんどの大学で行われている。

学内成績と高校成績（高校調査書学習成績）との相関についての調査研究はかなりの大学で行われていて、両者はかなり相関が高いといわれてきた。

今回の調査研究の報告でも、それ程高くはないが正の相関があるというものから、かなり高い値を示し年毎に変化も大きく安定しているという大学まである。そして専門科目を含めて、高校成績が大学成績に与える影響は極めて大きいと指摘している大学があった。

調査の方法は、高校成績（評定平均値）と学内成績との相関、学内成績については教養課程の成績と専門課程の別、また高校の各教科・科目と大学の科目との比較が多く行われている。この調査の中で特に外国語科目については、全般的に相関係数が高いという大学がいくつかあった。

一方、59年度は56年度より低い相関を示している大学や、専門課程の成績との相関は一部の学部を除いては予想に反し認め難かったという大学もある。これは、高校間格差や高校成績の表現方法（5段階評価）と大学の専門課程の評価方法の違いが結果について大きな影響を及ぼ

しているとしている。

この種の調査研究で、高校調査書が学内成績を予想できる能力をもつものとし、具体的な利用方法についての報告もあった。

学内成績と共通第1次学力試験との調査研究については、両者の相関は低いかあるいはほとんど相関はみられないという大学があり、一方、科目によっては比較的相関係数が高く、入学後の成績を予測する上で比較的有効であると指摘している大学もある。1次募集入学者と2次募集入学者との比較調査を行っている大学もいくつかある。共通第1次学力試験の得点は、2次募集入学者は高いが入学後の一般教育科目の成績は低く、中途退学者も多いという報告もある。

学内成績が高校成績に次いで第2次試験の成績との相関が比較的良好な正の値も示している大学や、第2次試験が専門科目の成績と高い相関を示すとしている大学もいくつかあり、この結果は第2次試験の重要性を示すものだと指摘している。しかし学部によっては、ほとんど相関が認められず、現段階では明確な指針を示すことは困難で、継続検討を要するという大学もある。

学内成績と入試成績（共通第1次学力試験の成績と第2次試験）の比較についての調査研究も多くの大学で行われている。

両者の相関はそう高い値ではないが、正の相関があるという大学から、入試成績は大学成績

特に専門課程の成績とはかなりの相関が認められたという大学まである。その意味では、新しい入試制度が合理的な改善であったと指摘している。教養課程の成績との相関は、自然分野では関係がみられるが、他の分野では系統的な関係がみえないという大学、教養課程各分野の成績と入試各教科の成績とはほとんど相関はないが、教養課程全体と自然分野は入試成績との相関が高いという大学もある。

一方、入試成績上位の者ほど専門課程での取得単位が低下してきた大学や学内成績と入試成績との相関が年と共に悪化している大学もあり、このことは偏差値による輪切り現象の必然的結果として、問題になっている入学生の均質化を示す例だと憂慮している。

推薦入学制度を導入した大学での調査研究も報告されている。

推薦入学者は、一般に共通第1次学力試験の成績では一般入学者より顕著に低い点数を示すが、学内成績では一般教育科目、専門科目でも逆に高い点数を示している大学がある。一般教育の分野で、人文分野、社会分野及び外国語については一般入学者に比べて優の成績が割合高いが、学部専門教育に関連が強いと思われる自然分野の成績には両者の相違は見出せないという報告もある。しかし一般入学者に比べると、推薦入学者の方が優れているという調査結果が多くみられた。

推薦入学者は学習意欲の面でも優っており、留年した者もなく、勤勉であるという評価がある。一方、最近の推薦入学者は、この制度を取り入れた頃の学生よりも成績が落ちてきたとの声もあるようである。

未だ推薦入学制度を取り入れていない大学で、その可能性を探るために調査研究している大学もあるが、高校成績と入試成績とはほとんど相関がみられないという結果もある。

職業高校出身者について、推薦入学制度を導入し一般入学者との比較をしている研究が若干あるが、職業高校出身者は一般教育課程での成績は普通高校出身者とほとんど差異がみられずそれほどの遜色はなく、一様に努力し、ある程度の順当な成績を修めているという大学がある一方、一般入学者についても本来の専門領域を一層深める傾向にあり、卒業後の進路選択にも明確な姿勢を示しているとの報告もある。

入学者選抜方法改善の資料とするため、留年者の発生状況および留年者の入試成績の特徴を調査研究した大学や学習意欲を失う症候をもつ学生を、入試段階で判別できるかを論ずるためにアンケート調査を実施した大学も若干みられる。

留年した学生の割合は年度によって多少の増減はあるが、共通第1次学力試験実施以降急激に増加したわけではなく、また留年には入学者の学習目的や意欲、学習環境といった条件が関わっているのだろうと報告している大学や、大学入学後留年しやすい学生像として本人の意志に反する学科に入学せざるを得なかった、いわゆる不本意入学の学生をあげている大学もある。入試成績の極めて良い学生で留年している者がおり、入試成績上の特徴は見出せないという大学もあった。

現行の入学者選抜方法による入学者の入学後の意識および学生生活の調査研究についても次のような多様な調査項目について調査したのが

多くみられた。志望大学の決定方法、情報の入手先、志望大学、選択の理由、講義や実験実習等、クラブ活動、アルバイト、交友関係など。また入学者選抜試験に関する意見、要望等についても調査している大学もいくつかある。学生生活については、ほとんど満足しているが、2次

募集で入学した学生はその学部には不満を感じ退学を考えた者もいなくないが、しかし時間の経過とともにそれが減少したという報告もあった。また入学した大学が本来の志望大学であったという学生が増加し、そのことが定着化したという調査報告もある。